
短編「神に選ばれた男 其の二」

鳥海ドゥンガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編「神に選ばれた男 其の二」

【Nコード】

N7866F

【作者名】

鳥海ドウンガ

【あらすじ】

百年に一度、魔獣の封印をかけなおす役目にある救世主。神によって選ばれし救世主が今現れる！第二弾！

とある王国の神殿に、世界を滅ぼしてしまうほど強い力を持った魔獣が封印されていました。

魔獣は封印の術によって閉じ込められているのですが、その術は一〇〇年間しか効力が続かず、効力が切れるたびに術をかけ直すなくてはいけませんでした。

封印の術を使うことができるのは神に選ばれし救世主だけです。救世主は封印が解ける二〇年前になると神によって指名されます。誰が選ばれるのかはまったく予想できず、まさに神のみぞ知るです。選ばれたいと思って選ばれないし、選ばれたくないと思って選ばれてしまうこともあります。

救世主に選ばれると頭のどこかに星形のアザができます。歴代の国王たちはそのアザを目印にして救世主を見つけ出し、一〇〇〇年以上も封印を維持し続けてきました。

現在、国を治めているのは第五五代国王です。その国王のもとへ、魔獣が封印されている神殿の神官がやってきました。

「王様、今年は救世主が神によって指名される年でございます」「おおそうか。ということはあと二〇年で封印が解けてしまうのだな」

「さようでございます。なるべく早く救世主を探し出し、封印の術の準備にとりかかるのがよろしいと思われます」

「わかった。ではさっそく將軍に命じて救世主を探させよう」
王様から救世主を探し出すよう命じられた將軍は国中の人間の頭を調べ、三年かかってようやく星形のアザがある少年を見つけました。

少年は五歳になったばかりで、羊飼いの家に生まれた子でした。貧しいながらも両親や兄弟たちと幸せに暮らしていました。救

世主に指名されたので、身の安全などを考えて王宮で大切に育てられることになりました。

王宮での暮らしはこれまでとは正反対で、とても贅沢でした。

二〇人もの世話係が生活に必要なことの全てを面倒みてくれ、食事は朝から晩まで豪華なご馳走でした。おかしやケーキも二十四時間食べ放題です。

少年は自分では何もすることが無いので、毎日をくつつやねくつつやねして過ごしました。

王宮へやって来た当時はガリガリにやせていた少年でしたが、半年で立派な肥満児へと変身しました。健康を心配する声も出ましたが、世話係の人たちは「ガリガリにやせているよりかは少し太っているほうがいいよね」と考え、特に食事制限はしませんでした。王様も「救世主なんだから食事くらい好きに食べさせてあげたらいいじゃん」と言いました。

そんな様子で五年、一〇年と月日は流れ、封印の術をかけ直す日まで一年を切りました。

そろそろ、封印の術を行う時に唱える呪文を覚えなくてはいけません。

救世主に呪文を覚えさせる係にはじいやが選ばれました。

「ぼつちやま、今日より呪文の勉強をしていきますぞ」

王宮へやって来て十数年。すっかり成長して少年から青年へと変わった救世主は、まるまる太った巨体をベッドに横たわらせて角砂糖を食べています。

「オツケー。じゃあ、これを食べ終わったらやろう」

救世主ははじめに勉強に取り組みました。

はじめのうちは毎日一回、全部で一〇〇文字ある呪文の書き写しをやりました。

一ヶ月ほどそれを続けて、どれくらい暗記できたのかをテストしたところ、何も見ないで言えたのは初めの五文字だけでした。

じいやは、少し勉強のペースをあげないと封印の日までに間に合い

そうもないなと思い、それから呪文の書き写しを朝、昼、晩の一日三回に増やしました。

一ヶ月が過ぎ、再び暗記のテストをしたところ、前回よりも二文字増えて七文字目まで覚えていました。

進歩はしていますがペースが遅すぎます。

これほど物覚えが悪いとは誰も予想していませんでした。

救世主の頭脳は平均をはるかに下回るレベルです。

しかし、だからと言ってあきらめるわけにはいきません。呪文を唱えられなければ魔獣が復活して世界が大変なことになってしまうのです。

じいやは自分の仕事の責任の重さを噛みしめ、心を鬼にしました。毎日一〇時間、付きっ切りで呪文の指導にあたります。

老体にムチ打って、来る日も来る日も救世主に呪文の書き写しや音読を指導し、時には自分も手本を見せたりしました。

救世主本人も、このままじゃヤバイと思い、一生懸命取り組みました。

二ヶ月してまた暗記のテストをしました。

結果は五文字。これだけ勉強したのに実力は下がりました。

「ご無体な……」

じいやはあまりのショックに血の涙を流して泣きました。

しかし、こうなってしまっただけ泣いているヒマなどありません。魔獣を復活させるわけにはいかないのです。

じいやは鬼にした心をさらに、その鬼ですら恐れる閻魔の心へと変えて、一世一代の大仕事を仕切り直しました。

もう甘いことは言っていられません。暴力、体罰なんでもあります。王宮の一室では昼夜を問わず、怒号と悲鳴が響き続けました。

そして、封印の術を行う直前の日になってやっと、本当の本当にやっこの思いで救世主に呪文を覚えさせることができました。何度やっても完璧に唱えることができるようになったのです。

じいやは大喜びです。長く家庭内別居をしていたばあやの手を取

ってダンスをしてしまったくらい大喜びしました。

封印の術を行う当日になりました。

救世主は太った体を左右にゆっさゆっさしながら王様や神官たちと一緒に封印の神殿へやって来ました。

封印の間へと続く扉の前までやって来ると、神官が小さな箱を取り出しました。

箱を開けると、古代文字がびっしりと刻印された、銀色の指輪が入っていました。

「では救世主さま、この封印の指輪をはめてください。呪文を唱えるとこの指輪からまばゆい光と共に聖なる力が放出され、魔獣を封じ込める結界となります。光が収まったら術は完了です」

「うんわかった」

救世主は神官から指輪を受け取ると、人差し指にはめてみました。指が太すぎてまったく指輪が入りません。太り過ぎです。

救世主は少し焦って他の指にも指輪を試してみました。が、どの指も太すぎて指輪が入りません。太り過ぎです。

「すいませーん、指輪が入らないんですけど」

「えっ！」

神官が驚きの声を上げます。

「指輪が小さいみたいです」

指が太過ぎるのです。

王様が言いました。

「他にもっと大きなサイズの指輪は無いのかな？」

「いやー、そういうのはちょっと聞いたことがありませんねー・・・」

「一〇〇〇年以上前から指輪はこれだけです・・・」

「あ、小指の先っちょなら少しだけはまった」

救世主は小指の先にちょこんと乗つけた指輪を神官に見せます。

「これでも平気ですかねえ？」

神官は渋い顔をしています。

「うーん・・・どうなんでしょう。やってみない事にはわかりません

ねえ……。平気かもしれないし、平気じゃないかもしれない……。王様が思わず声をあげてしまいました。

「おい！国の一大儀式なんだぞ！国が滅ぶ危険があるというのに、そのいい加減な答えはなんだ！」

「そそそ、そうは申されましても、太りすぎて指輪が入らなかったという前例は過去の記録でも見たことがあります！なんともしようがないのです！」

「ムムムム、この土壇場でこんなことになるうとは！」

救世主はイチかバチか、小指の先っちょに指輪を乗せた状態で封印の儀式をすることになりました。

成功するのかしないのか。まさに神のみぞ知ります。

封印の時間が来ました。

救世主は、左の小指の先っちょにはめた指輪を逆の手で押さえながら、封印の間へ一人入っていきました。

「じいや、ボクがんばってくるよ……」

それから三日が過ぎました。

今、国は魔獣が暴れて大ピンチです。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7866f/>

短編「神に選ばれた男 其の二」

2010年11月16日08時32分発行